「なき声以外は、ムダにしない」
～牛を知ろう、和太鼓から肉の学習へ～

室生西小学校　畑山　明美
米山　美千代

１　はじめに

昨年度は、久しぶりに３年生の特別支援学級生２人を担任することになった。そして、３年生の社会科を担当することになった。室生西小学校に来たばかりなので、３年生の子どもたちと一緒に地域学習をすることで、自分もこの地域のことが分かっていいかもしれないと思った。そして、３年生といえば、なかま「なき声以外は、ムダにしない」があるなあと、学年当初に思っていた。２学期の地域学習で、菟田野の毛皮革工場を見学するなら、「なき声以外は、ムダにしない」をその流れの中に取り込んで学習したいと思い、９月から具体的な流れを考え始めた。社会科と総合的な学習の時間は、互いにリンクしながら地域学習を進めていたので、総合的な学習の時間も使いながら取組を進めた。

２　「なき声以外は、ムダにしない」

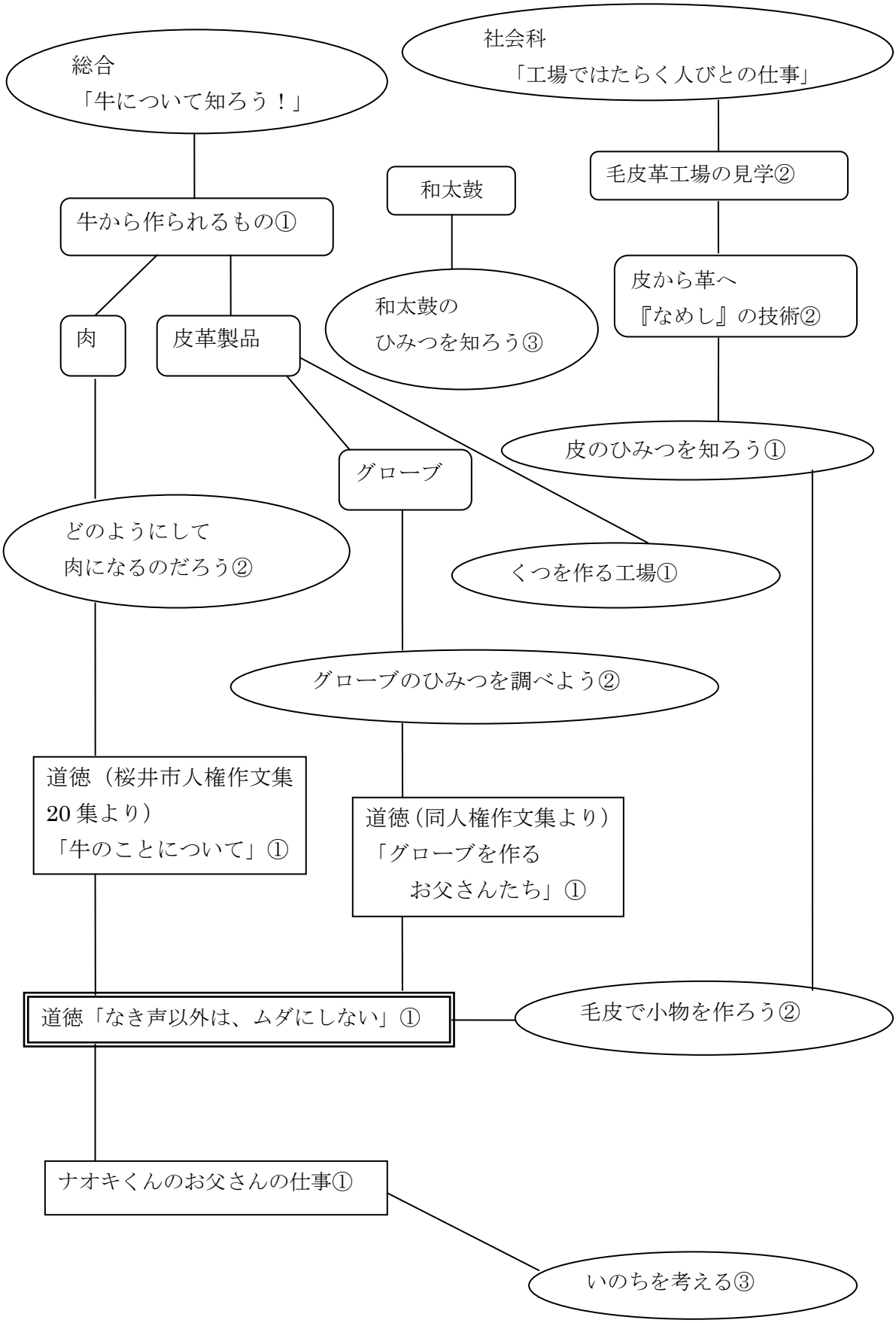
初めて３年生を担任したのは、宇太小学校でだった。毛皮革工場は、校区にあったので、見学も行ったし、なぜ工場団地がつくられたのかという経緯なども、子どもたちと一緒に勉強した。３年生なかまの重点教材は「クレヨンはぬすんだのじゃねえ」という記憶が鮮明なので、多分、まだ旧なかまで学習していたと思われる。次に、安倍小学校で３年生を担任した。安倍小学校は、校区に被差別地域のない学校である。ここで、「なき声以外は、ムダにしない」を学習する時、教材文で学ぶだけでよいものかと考えた。子どもたちが、自分の体を通して、実際に見て、さわって、感じて・・・そんな学習活動をしてみた。今回の実践も、その時のものがベースになっている。

私たちは日々の生活の中で、肉を食べ、皮革製品と深く関わって生きている。私たちが店で目にする食肉や皮革は、かなり姿を変えた形なので、そこから元の姿を想像することは、まずない。それらが職人たちのどのような技術で、どのように姿を変え、私たちのもとへ届けられるかについては、ほとんど気にもしていないのではないだろうか。「食肉」「毛皮革」「太鼓」は、長い間にわたり部落産業として捉えられてきたために、「社会を支える仕事」「世の中に必要な仕事」でありながら、「人の好まない仕事」として考えられがちであった。そして現在、それらの仕事に対する差別意識は払しょくされたと言えるのだろうか。正しく学び、考える機会がなければ、誤った観念はそのまま次世代に受け継がれていくであろう。子どもたちが、社会とのつながりに気づき、考え始めるこの時期に、食肉や毛皮革について学ぶ場になればと授業を組み立てた。

「なき声以外は、ムダにしない」は、食肉業に携わるおじさんが、牛はその体のほとんどが私たちの暮らしの中で使われることなどを、子どもたちに話した内容が中心になっている。食肉が、人々のどのような労働を経て、どのように私たちの手元に届けられるのかについては、ほとんどの子どもたちは考えたことがないし、知らないでであろう。仕事に対して正しい見方をするために、いろいろな情報を得ることが大切である。また、学習が単なる知識とならないための手段として、見学や体を使った活動を取り入れたいと考えた。子どもたちの体と心を通して、命を大切にして働く人々の願いを感じ取り、仕事を見つめる目を育てたいと思った。

3　学習活動の流れ

≪○内の数字は授業時数≫



【参考図書・資料】

☆『食育・皮革・太鼓の授業』三宅　郁子　解放出版社　1998

☆『いただきま～す！』二宮　由紀子文　　荒井　良二絵　エルくらぶ　解放出版社　2010

☆『も～お～　うしです！』　うしのえほんをつくる会文　とく　はるあき絵
エルくらぶ　解放出版社　2004

☆『太鼓』三宅　郁子文　　中川　洋典絵　エルくらぶ　解放出版社　2001

☆『きみの家にも牛がいる』小森　香折作　中川　洋典絵　エルくらぶ　解放出版社　2010

☆部落問題学習プラン集『まち　ひと　くらし Vol.３』　大阪府人権教育研究協議会編

☆『身近なことから世界と私を考える授業』（100 円ショップ・コンビニ・牛肉・野宿問題）
開放教育研究会編著　　明石書店　2009

☆『いのちをいただく』内田　美智子文　諸江　和美絵　西日本新聞社　2012

４　取組について

牛について知ろう

子どもたちは、2 年の時に校区探検で牧場を見学し、エサをあげたにもかかわらず、始めそのことを忘れていた。今年も見学したかったが、すでに牧場の仕事を辞めておられ実現しなかった。そこで、「牧場は学校だ！～生きる力をはぐくむために～」（制作　中央酪農会議他）というビデオを視聴した。また、牛を育てている人たちの工夫や努力、願いを知るために、人権作文を使った。

和太鼓のひみつを知ろう

秋の運動会の応援合戦では、各色の６年生が和太鼓を力強くたたく姿があった。そこで、この和太鼓を入り口とした。地域には、海神社の「いさめ太鼓」があり、子どもたちの中には、秋祭りなどで和太鼓をたたいた経験のあるものもいて、興味をもってきた。また、学校には宮太鼓が複数あり、グループごとに太鼓にふれ、たたき、感じたこと、疑問に思ったことをまとめた。その後、絵本『太鼓』を使いながら、さらに和太鼓について理解を深めた。和太鼓の面が牛の皮１枚でできていることからも、牛の皮の大きさが分かり驚きだった。皮を留めている鋲の数を数えるのも楽しそうだった。

○たいこのたたくところに、手をのせるとひびいていた。
○たたいているときは、あんまり手はぶるぶるしなかったけれど、たいこのよこをさわってみたら、すごくぶるぶるした。
○よこの黒くて丸いやつは、たぶん１４８こあった。どう体は、木でできている。たいこをもつところは、たぶん金ぞくでできている。うつところは、はばだいたい４４㎝です。
☆たいこは、どうやって作っているのか知りたいです。いつから使われていたのかも知りたいです。
☆たいこのたたくところは、なんでできているのだろうか。中は、どうなっているのだろうか。

太鼓の製造工程を学習した。製造工程は、大きく分けて胴づくりと革づくりに分かれる。絵本の挿絵や写真を中心に学んでいった。太鼓を作るのには、とても長い時間と労力がかか

ることを知った。また、太鼓職人は、太鼓の音を聞いただけで自分の作った太鼓が分かるということに、子どもたちは驚いていた。

グローブはどのように作られているのか

今年の３年生は、ミニバスに参加している子どもたちが多く、野球をしているという声はあまり聞かない。そのためか、グローブへの関心もあまり高くはなかった。とはいえ、グローブは皮革製品の代表の一つでもあるので、学習活動に入れた。県が作成した社会科のビデオシリーズの中に、「グローブ作りの工場」があり、よい教材となった。ビデオ「くつを作る工場」も同じように皮革を扱う仕事で参考になった。仕事の実際は、映像にたよりつつも、グローブを作る人たちの工夫や思いなどにせまるために人権作文を使った。グローブづくりの金型をぬいてもらったものがあったので、子どもたちに見せると、「あながいっぱいある。」「手のひらが大きい。」「予想以上にたくさんのパーツや形があった。」などのことを感じていた。グローブを作る技術がすごいなあということを感じることができた。

皮から革へ　～『なめし』の技術～

菟田野の毛皮革工場団地を見学した。工場団地には、鹿のセーム皮や、毛皮革のコート類など、いろいろなものを作る工場が集まっているが、今回は、羊の皮からいろいろな製品を作っておられる工場の見学だった。始めに、オーストラリアから輸入された原皮を見て、お話を伺った。原皮は、塩漬けされており、見た目は黒っぽくて独特のにおいがした。その後、説明を受けながら工場内を見学したが、毛皮や薬品、染料のにおいを強く感じながら回った。しかし、それらのにおいも、原皮から製品へと加工されていく中で徐々に薄れ、最後には真っ白でふわふわのムートンになっていった。おじさんに触っていいよと言われ、子どもたちは、自分の手で触れて、その手触りを楽しんだ。目の前で、『なめし』の工程を経て、原皮が美しい毛皮になっていくところに、働く人たちの工夫と技術があることを感じることができた見学だった。また、縫製のコーナーでは、重い毛皮を手で引き上げるようにして、重ね合わせ、わずかな縫い代を縫い合わせている姿もあった。そこには、中国から研修のため働きに来ている人もおられ、遠足のバナナ工場見学時に出会った、外国から働きに来ている人達の姿と重なった。

羊の毛皮のいちばんよいところは、背中から尾につながるところだが、製品を作る過程で、毛皮の端切れも出てくる。それらも捨てることなく、また縫いつないで製品にすると教えてもらった。また、工場には、ムートンを製品に仕上げていく過程で細かな綿毛のようなものも、床にたくさん落ちていた。しかし、それらも集められ、大きなビニル袋に入れられ、田原本町の肥料工場に送られて肥料になることも、教えてもらった。見学の最後に、「オーストラリアでは、羊の肉は食べるが皮は捨てられる、その皮をむだなく製品にしている。」という話があった。『最後の最後まで』使うと話しておられた。この言葉は、まさに、「なき声以外はムダにしない」という学習に繋がるものであった。

工場団地内には、「鳥獣慰霊碑」もあり、後に「なき声以外は、むだにしない」にある屠畜慰霊碑の写真と共通して考えられ、命を大切に思う気持ちを知る手掛かりとした。

○カーペットやスリッパやざぶとんになる前は、あんなに大へんな仕事をしているんだなあと初めて分かりました。さいしょは、くさかったけど、だんだんにおいもしなくなってきました。中国の人もはたらいていました。オーストラリアからゆ入していることが分かりました。生後３～４か月の子ひつじをつかっていました。ミシンもとくべつなミシンをつかっていたので、すごいなあと思いました。

○しおづけすることが、はじめて分かりました。ぬうところは、ずっと手元をむいていました。60～70 度のところでいる人は、とってもあせをかいていました。いっぱい毛皮がおいてありました。毛の高さまであわせるきかいを、はじめて見ました。さいごのさいごまでむだにしないと、分かりました。

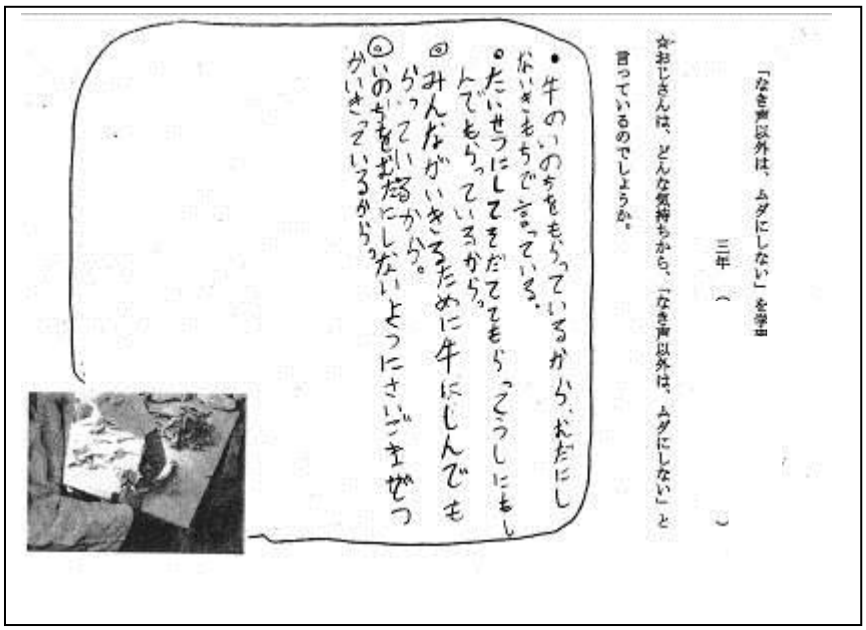
○ムートンの工場では、毛皮をどこもむだにしないで、はしからはしまでつかうことが分かりました。ゴミのような毛のかすも、ちゃんとごみにしないでひりょうにすることが分かりました。すごいと思いました。あまったきれっぱしも中国におくって、いろいろなせい品にすることも分かりました。いつもわたしたちがつかっているものは、いろんな人がいろんなくふうをして作っていることが分かりました。

どのようにして肉になるのだろう

私たちが肉を買うときは、すでにさばかれてきれいに並んでいる姿なので、生きている牛がどのように肉の形になるかは、見えてこない。また、考えてみようと言っても、イメージできるものではないだろう。できれば、身近な肉屋さんに話を聞きたかったが、あいにく身近な校区に肉屋がない。そこで、ここでもビデオや写真を使って学習を進めた。子どもたちの発達段階から、絵本も利用した。牛が大切に育てられていることについては、人権作文で学習し、実際の枝肉の大きさや、牛を解体しているところはビデオで見た。子どもたちは、興味津々で「でか～」「大きいのこぎりや」などの声がでていた。飼育農家で大切に育てられた牛が、どんどん姿を変えていくことを、順序立てて知ることができた。子どもたちにとっても、新鮮な驚きだったに違いない。牛を解体するときには、いろいろな道具を使うが、大きな枝肉を割る時は、チェーンソーのようなのこぎりが登場し、びっくりしていた。職人さんは、道具、とりわけナイフを大切にして毎日のように研ぐ。そのため、ナイフは使いこむとだんだん始めの大きさより小さくなってくることも、写真で確かめた。

なき声以外は、ムダにしない

主題名「命を大切にして働く人々の願いを知ろう」、ねらい「食肉業や毛皮革業と、自分たちの生活とのつながりに気づき、動物の命を大切にして働いている人々の努力や思いを知る。」という授業を展開した。研究授業だったので、最初子どもたちが緊張して、なかなか挙手しての発表に繋がらなかったため、前時までの振り返りに時間がかかり、最後のまとめの時間が足らなくなってしまった。姿を変えた牛の命が引き継がれていること、だからこそ肉はおいしく頂き、ランドセルなどの製品も大切に使うことについて考えるために、後日さらに時間をとった。牛の命を頂くことで、私たちの命が支えられていることに気づくとともに、牛の命を大切にして働いている人々の努力や願いに気づいた感想が多く書かれており、授業のねらいは達成できた。


「なき声以外は、ムダにしない」を学習
三年（　　）
☆おじさんは、どんな気持ちから、「なき声以外は、ムダにしない」と言っているのでしょうか。
・牛のいのちをもらっているから、むだにしないきもちで言っている。
・たいせつにしてをだてをもらってこうしにもしんでもらっているから。
・みんながいきるために牛にしんでもらっているから。
・いのちをむだにしないようにさいごまでつかいきっているから。

取組の期間が２カ月にわたり、その間の情報量も増えていくので、必要に応じて後で振り返りやすいようにワークシートを活用した。それらのワークシートを、順次貼り付けて本の形にしていったので、後で振り返りやすく、学習の足跡がよく分かった。最後に、その本の表紙を作ったときも、子どもたちは思い思いの表題をつけ、イラストを工夫して描いた。また、この授業の時にも、これまでの学習を振り返ることができるように、掲示物を工夫した。実際の授業でも、役立ったと思う。

○牛を大切にすることが分かりました。し育農家で大切に育てられ、食肉流通センターでも大切に思いながら、肉や皮を切って、みんなとても大切に思っていることが分かりました。なので、食べる時には「ありがとう」と思いながら食べるようにします。人間のためにいのちをくれているので、とても感謝します。切るときに、きれいに、かたいところややわらかいところを分けて切っているのがすごいです。これから、「いただきます」「ごちそうさま」と言うときに、牛に感謝をしながら、食べるようにします。

○牛を切るときはかたいですか。牛をきぜつさせてきぜつしているときに、牛を切るんですか。育てる時も大切に思っていて、肉を切る時も大切に切ろうと思っているので、ぼくも大切に思いながらたべたいと思います。

○なき声以外はムダにしないの意味がわかりました。牛のいのちをもらってわたしたちは生きているんだなとわかりました。牛をすみからすみまで使うとわかりました。みんなのために牛にしんでもらって、むだにしないようにしているとわかりました。いのちをむだにしないように、のこさず食べたいです。

毛皮で作ろう

毛皮工場でもらった羊の毛皮で小物を作った。ふわふわとした感触を活かして、ぬいぐるみのようなものを作れないかと考えた。いろいろな先生からもアドバイスをもらい、保護者の方にもお手伝いを呼びかけて、ボランティア 3 人、教師 3 人が支援しながら製作した。希望者は、針と糸も使ったので、支援してもらって本当に助かった。子どもたちは、どの子も、何を作ろうか、どんなふうにしようかとやる気まんまんだったので、予想以上に、かわいい作品、工夫された作品がたくさん完成した。作品を手にした児童のスナップ写真を撮り、ワークシート集に貼り付けた。

ナオキくんのお父さんの仕事を考える

「仕事」という視点から考えるために、『身近なことから世界と私を考える授業』（開発教育研究会編著・明石書店）のなかの、「命の食べ方を問う」の一部を使って学習した。

「お父さん、牛を殺しているの、残酷だなあ。」と友達に言われ、本当のことが言えず、「肉屋で肉を売っているだけだ。」と言ってしまったナオキくんの相談にのるという学習活動である。ナオキくんにどんな言葉をかけるか、友達にどう説明するかというところに、前時までの学習がどう反映するのか知りたかった。「ナオキさんのなやみにどのように答えますか。」という設問にそれぞれが答えた。

○だいじょうぶ。あの子だって、お肉を食べているんだよ。あの子も命をもらっているんだよ。本当のことを言えば、あの子もわかってくれるよ。
○「牛をころしていない！解体しているんだ。解体っていうのは、ころしてほっておくんじゃなくて、みんなに命をあげてくれているんだ。」とその友達に言って、正直に話した方がいいよ。
○本当のことを言った方がいいよ。その理由は、みんな牛ややさいから命をもらって食べてるから。お父さんは牛に感謝して解体しているから、自分かって感謝したほうがいいよと、友達に言ったほうがいいよ。
○お父さんは一生けんめい働いているんだから、友達に本当のことを言ったほうがいいよ。それに、友達に牛をころすのじゃなくて、牛を解体すると教えた方がいいよ。
○牛の命をもらって、みんなの役にたつ仕事をしている。本当のことを言った方がいいと思う。

学習全体を通しての感想も書かせた。

○みんな、知らない人は、ざんこくだと思うのかなあ。
○牛さん毎日ありがとう。そして、はたらいている人もありがとう。
○みんなが生きていけるように命をもらっているということがよくわかりました。牛や生き物がいなかったら、生きていけないので、もし、食肉センターではたらいている人がいたら、ありがとうと言うようにします。
○その友達は、牛のことを知ってほしい。

5　取組を終えて

９月の運動会を終えてから、２学期いっぱいかけて取り組んできた。そのなかで、子どもたちはいろいろな出会いをしてきた。情報の多さも、どんどん増えていった。その時間、時間に感じて学んだことを、教師はずっと覚えておいてほしいと願うが、子どもたちはそうはいかない。それでも、エッセンスのようなものだけでも、心の片隅に残しておいてほしいと願う。

ナオキくんの学習後の感想のなかに、知らない人は残酷だと思うのかなあ、その友達にも、解体の仕事のことを知ってほしい、話した方がいいというものが多かった。人は、自分の知らないことや分からないことに対して、恐れを抱き、こわいと思うようになり、差別意識につながることもあるのではないだろうか。解体とは、牛の命をいただき、牛の命を活かすことであると知れば、無責任に残酷だというような言葉は出てこないのではと、子どもたちも感じてくれたからこその感想だと思う。

３学期、命についての学習を深めるために、奈良県うだ・アニマルパークのスタッフをゲストティーチャーとして迎え、「いのちの教育プログラム」を受けた。このプログラムは、私たちと動物たちの関わりに気付き、彼らにも感情や要求があるということ、動物たちの「いのち」が私たち人間と同じであることを感じ、それぞれの動物たちの「いのち」がよりよく生きるために私たちがどのような責任を負っているのかを考えることを目的としている。このプログラムの中でも、子どもたちは、私たちが毎日食べているものすべてが他の生き物の命であることを、再認識することができた。